

府に移譲する権利、信託する権利は、全部ではなく一部である——への批判的応答であった¹⁷⁾。また、固有の力をめぐるルソー＝マルクス関係も確認しておきたい。ルソーは、革命前に個々人のそれまで持っていた固有の力が、創り出される国家（アソシエーション）に、全面的に譲渡されなければ、国家の創設は前に進まないと考えた。なぜなら、新しいアソシエーション＝国家に、人々はただ「集合」するのではなく、「結合」することが必要とされたからである。「結合」には、人々の人格の質的転換が不可欠だからである。それに対して、ルソーの固有の力を誤読したマルクスは、プロレタリアの有する固有の力を肯定し、これら固有の力を組織し社会的な力に結集することが人間解放をもたらすと説いたのだ¹⁸⁾。「結合」と「集合」の違いについては改めて論ずるが、ここでは、ルソーの全面譲渡の譲渡先が、人間にではなく、創設されるアソシエーション＝国家に対してである点を確認、強調しておきたい。

④は、結果としてその「宗教」は何だったのか、である。ルソー的観点から結論のみ述べれば、力が権利を生むと盲信する「力＝正義」教と捉えられよう。『社会契約論』の「最も強い者の権利について」の章（I-3）で、力は、それが対象者に及ぼされている間だけ実効支配を可能にするのであって、力は決して何の権利も生まないこと、したがって力は正義の基準にはなりえないことをルソーは論証した。それに対し、ドイツ生存圏の思想は、ドイツ国民の生存権を確保すると称して、他民族の生存権を軽視し否定しさえする思想であった¹⁹⁾。こうした教義のカリスマ的教祖であるヒトラーは、ドイツ生存圏の拡張、膨張に際限のない野心を抱き、その拡大に歯止めを持たぬ「利己心」に突き動かされた。ここに言う利己心は、自国の国益を第1のものとして、他国の存在、他国民の生存を顧みず、ないがしろにしてもかまわないという感情のことである。ドイツ国民は、カリスマ的指導者の説く「ドイツ民族」神話、その内実は、「力＝正義」教の前に、結局、内なる良心と理性をとともに働かせて自ら判断すること、考える能動性を放棄し、教祖の判断、意志に同調し、従うだけの受動的な存在と化してしまったと言わざるをえない。

以上、新国家・第三帝国の創設の意味するところを4つの問いから確かめてみた。その上で、ドイツ国民の示した熱狂とは何だったのだろうか、熱狂は国民の意志と言えるのだろうか、という問いに答えなければならない。そのために、本稿の第1の定点である1794年6月の最高存在の祭典時の人々の感情とニュルンベルク・ナチ党大会時の人々のそれとを「熱狂」に着目して対比することにしたい。1794年6月と言えば、フランス革命が急進化し、ジャコバン独裁が頂点に達した時期と重なっている。フランス革命の生んだジャコバン独裁をロシア革命後のスターリンの左翼全体主義や第三帝国のヒトラーの右翼全体主義の歴史の上流に位置づけ、思想的な源流に、ル

17) Locke (1690).

18) マルクス (1974) 52-53頁.

19) 谷 (2012).

ソーの思想を見る「ルソー=ジャコバン=全体主義」という理解が思想界、言論界にあるが²⁰⁾、私は以前、フランス革命の歴史的現実とルソーの一般意志の理論との関係に絞って、こうした理解の問題性、誤謬について論じ、ルソーとジャコバンの間にある等号を外すべきことを主張したことがある²¹⁾。本稿では、さらにジャコバン独裁期のフランス人民とヒトラー独裁期のドイツ国民の「意志」や「感情」を対比、分析すべきだと考えるからである。

党大会の主宰者はヒトラー、祭典の主宰者はロベスピエールであるが、国民、市民の意志、発意の有無が問題である。一方のニュルンベルク・ナチ党大会は、ヒトラーの意志が最初から最後まで貫かれ、文字通りヒトラー主導で行われた。他方、パリだけではなく、他の都市でも開催された最高存在の祭典は、ロベスピエール一人の意志によって挙行された祭典ではない。フランス革命史家・ヴォヴェルの実証研究からも、人々の下からの、地方からの発意があったことが明らかにされている²²⁾。祭典挙行の原案も公教育委員のマティウーによるものであった²³⁾。では、2つの催しの会場の雰囲気、会場を埋め尽くしていた参加者の感情はどうだったのか。レニの映像には、党大会や付随する行事に集っている人々の総統ヒトラー個人に対する高ぶった期待感、讃嘆の有り様が映し出されている。他方、最高存在の祭典に集った人々には、ロベスピエール個人に対する讃嘆、ましてや熱狂は見られない。祭典には厳粛さが伴っていたし、人々の喜びの感情は、人々を自由な者とした革命の神、最高存在に対して向けられていたのである²⁴⁾。

本章を小括しよう。ナチ党大会の熱狂とは何か。ドイツ国民は、神なき時代の「力=正義」教のカリスマの教祖に帰依し、喜んで自身の意志、判断を放棄した。言うまでもなく、ヒトラーとドイツ国民の関係は、神-人関係ではなく、人-人関係に他ならず、なぜ神ならぬ一個の人間の意志が多数の人間の心を神のごとく支配するのか、「神話」・「信仰」の圏外にいる者にはなかなか理解できない。1人の独裁者の意志がすべてのドイツ国民の意志と1つである、一体化しているとの教義（「ヒトラーはドイツ、ドイツはヒトラー」）は、にわかには信じがたい。しかし、高度な技術に裏打ちされたラジオや映画等のメディアを最大限活用し、繰り返されるナチスの宣伝、教化や国民教育によって、ドイツ国民は、ただ1人の指導者の意志、判断にすべてを委ねることが、自分たちの生存を確保、充実させ、幸福を増進すると信じるに至った。大衆社会の奴隷意志の誕生、大衆民主主義時代の盲信、狂信の出現を私たちはそこに見なければなるまい。

一般に、代議制下の近代国民国家には、政府、官僚、あるいは君主、議会といった多元的な機関、アクター間に、対立しせめぎ合い、あるいは協調、妥協を繰り返す複数の、多元的な「団体

20) Talmon (1952), Arendt (1963).

21) 鳴子 (2001) 322-345頁 = (2012) 66-88頁, 樋口 (2004) 100-107頁.

22) Vovelle (1988) pp. 155-192 (169-208頁).

23) Mathiez (1910) pp. 217-218 (193-195頁), Furet (1988) pp. 608-610 (619-620頁).

24) 鳴子 (2001) 第7章「ルソーの宗教論とフランス革命の諸過程 (255-299頁)」を参照されたい.

意志」が存在する。第三帝国の創設では、言うなれば、まず議会の「団体意志」殺しが強行され、続いてそれにとって代わった政府の「団体意志」が、ただひとりの独裁者の意志へと減縮され、ヒトラーの意志こそが第三帝国を統御する「巨大団体意志」となるプロセスが進行したのである。意志の数はただ1つの独裁者の意志（大衆民主主義下の「主人」の意志）に縮減された。現代の「主人-奴隷」関係が出現してしまったのである。

3. フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ」

第2の定点観測の地点は、ナポレオン一世占領下のプロイセンの首都ベルリン（ベルリン学士院）にて1807年から翌1808年にかけて14回にわたって行われた講演「ドイツ国民に告ぐ」である。講演者フィヒテは、周知のようにカントから多大な影響を受けた哲学者であり、フンボルトが設計し、近代の大学の創始と位置づけられるベルリン大学（1810～）の初代総長（学長）としても知られる人物である。私がこの連続講演に着目する理由は、この講演が、哲学者のアカデミックな世界で発表した著作・研究ではなく、学問の世界から一歩外に出て、多様な一般の聴衆に向けて発しているメッセージである点にある。というのも、本稿が突き止めたいものは、国家、政府、為政者側の意志だけでなく、むしろ、一般の人々の「意志」であり、為政者と一般大衆との「意志」の関係であるからである。

まず、当時の仏独の状況を押えておこう。占領者側のフランスでは、講演の数年前の1802年に、ナポレオンが人民投票を行い、広範な人々から357万対8千という圧倒的な賛意を得て終身執政に就任し²⁵⁾、ついで1804年には世襲皇帝に即位していた。そしてナポレオン率いるフランス国民軍が、プロイセンを含むドイツ諸国や広くヨーロッパ諸地域に軍事進攻したことは周知の通りである。他方、占領された側のプロイセン、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世を君主とするこの王国は、この時、なお、多数に分かれたドイツ諸国中の一強国にすぎなかった。

それゆえ、フィヒテの講演が、ドイツ諸国が隣国フランスの軍隊に占領された危機の時期に、ナポレオンに率いられた国民軍、国民国家フランスに対する抵抗の言説である点は確認しておかなければならない。が、私がこの第2の定点で突き止めたいのは、フィヒテが講演中、一貫して聴衆に喚起している「国民意識」とは何か、という問題である。もう少し踏み込んで言えば、「国民意識」とは、国民の意志、国民の主体的、能動的な意志なのだろうか、という問いである。

フィヒテの言うドイツ「国民意識」とは、これまで存在せず、これからつくり出されるべきものである。では、フィヒテが「国民意識」の形成に不可欠と見なすファクターは何だろうか。フィヒテにおいては、種族、民族が生物学的ないし生理学的なレベルで問題にされることは

25) 本池（1992）97頁。

決してなく、ナチズムの如き学問的根拠に乏しい人種主義によってドイツ人の優位性、卓越性が主張されることは断じてない。普遍的な原理を奉ずる哲学者フィヒテの知性は、それを許さない。フィヒテが第1に重視するものは言語である。あるいは言語と教育と言ってもよいかもしれない。フィヒテは、ドイツ語を媒介としたコミュニケーション圏の形成、成熟を志向し、ドイツ語による「ドイツ国民教育」を行うことによって、「国民意識」を育むことを求めているからである。

フィヒテは第5講演において、民族の精神的な発達の間、民族の生命を湧き立たせ、躍動させる場として、哲学と詩作に着目する。そして哲学と詩作を可能にする言語とそうでない言語とがあると言う。フィヒテは前者を「生ける言語」、後者を「死せる言語」と呼び、こうした言語の相違によって、ゲルマン民族は2つに分かれたと主張する。「生ける言語」とは、外国語と混交せず純粋性を保持しているとされるドイツ語を指し、「死せる言語」とは、端的に言えば、古代ギリシア、ローマと接し、外国語と混交したとされるフランス語を指す。要するに、フィヒテはフランス語に対するドイツ語の優越を主張しているのである。そして、その優位性の根拠を、言語の純粋性の保持/喪失、外国語との混交の有無に帰している。ドイツ民族の精神性、道徳性が発達してゆくのは、「生ける言語」であるドイツ語の優位性のゆえである、と。「死せる言語」・フランス語にあっては「感覚的な領域」との接合が乏しいために、本来的な意味での詩を持たない、とフィヒテは断言するのである。このように、フィヒテはドイツ人の卓越性をストレートに民族、種族的な位相では主張しないが、独仏の言語比較を通して、ドイツ語を話す人々の優位性を強調している。占領という危機下の対抗言説である点を差し引いても、自民族の使用言語を「生ける言語」と言い切り、その優位性を力説する点に、フィヒテのメッセージの特色が色濃く出ている。

それでは、ドイツ語のコミュニケーション圏へのまなざしの下に提唱される「ドイツ国民教育」とはいかなるものだろうか。フィヒテは、第9講演でスイスの教育家ペスタロッチの教育を取り上げ、それを高く評価する。生徒を直観の世界に導き入れ、計画性を持った教育を施そうとする点がとりわけ評価される。しかし同時に、その教育が民衆教育に傾斜している点が欠陥とされる。こうして、フィヒテはペスタロッチの教育の根本概念を批判的に継承して、「学者の教育」を含みつつ、広範な国民教育を展開しなければならないと説くのである。「ドイツ国民」をつくり出すことが教育の目的であるのであれば、教育対象を民衆だけ、知識人層だけに限定するわけにはいかないのは当然である。君主国の身分間に横たわる巖然たる溝を埋め、身分間に流動性を持たせて、「ドイツ国民」を生み出すことこそ、広範な人々を包括する「国民教育」の役割であると考えられたのである。

ならば、フィヒテの喚起する「国民意識」は、ドイツ国民の一般意志と見なすことができるのだろうか。第1と第2の定点には共通点がある。双方とも他国との戦争に直面して危機の状態にあったという点である。1794年のフランスは、革命潰しの干渉戦争の渦中にあり、革命の遂行と

新国家創設が危機にさらされていた²⁶⁾。他方、1807年から1808年のドイツは、フランス国民軍に占領され、国家の独立が危機にさらされた「戦争状態」にあった²⁷⁾。要するに、これら仏独2つの出来事（最高存在の祭典とフィヒテの講演）は、それぞれが、危機脱出の、抵抗の、呼びかけであったという共通点がある。問題はその呼びかけが、一般の多数の人々の内発性、発意と十分に出合っているか、呼応しているものなのか、である。

結論を先にすれば、「国民意識」は、国家の意志を受け入れ、下支えする被治者の受動的な意識である。それは、国家の意志の形成に関与せぬ一般国民に、上からもたらされる国家の意志決定を受け入れる受動性を準備するものと言えるからである。フィヒテの考える国家の意志は、ルソーのようにすべての市民の独立した意志から発見され、作り出されるものではなく、政府、官僚、君主、あるいは議会を含めた国家の主要な機関、アクターが、合成、形成するものである²⁸⁾。フィヒテの目指す「国民教育」は国家を教育の担い手とする。国家が教会の位置に代わり、それと呼応して、哲学と詩作が宗教に置き換えられている。1807-08年のフィヒテは国家の創設に立ち合っているわけではないし、新国家の創設を直接、志向しているわけでもない。その点で1794年との相違は大きい。それゆえ、フィヒテは国家創設の立法者ではなく、内面的、精神的側面で国家の再編強化を促す、上からの改革的な提言者と言えるだろう。

ところで、「国民教育」が国内において一般国民の受動性をつくるとした点をもう少し補足しよう。「国民教育」は身分の分離ではなく、「一体としての」国民をつくるものである。国民の中には、社会の底面から社会的上昇を遂げて国家の意志形成の一翼を担う者も出てくるだろう。しかしそれはごく少数に留まるのであって、多数の国民は国家の意志形成に関与せず、国家の意志を受け入れ、従う以上、国民の基本的な性格は受動的と言わざるをえないということである。ここまで、一国における国民の受動性を指摘して、市民の意志、市民の能動性を要件とする一般意志形成との隔たりを確認した。

今度は、「ドイツ国民」はどこまでの範囲、広がりを持つ／持ちうるのかを考えてみよう。フィヒテは現にあるドイツ各国が競争して国民教育を行うべきことを述べており、ドイツ語圏を1つの国家として政治的に団結、連結する構想を提示しているわけではない。フィヒテの主観的意図は、政治的レベルで1つのドイツを志向しているとは言えないのである。しかし、民族の誇り、「世界の基幹民族」としての誇りを喚起し、高める場として、ドイツ語圏の一体性を繰り返し強調

26) 鳴子（2001）第7章。

27) 宇京（2014）268-278頁。

28) フィヒテは国家のあるべき政治的意志決定については、具体的、直接的に講演で展開してはいないが、中世ドイツに存在した、君主権が制限的な共和体制を評価し、他国の専制政治を批判的に見ている。こうした点からフィヒテは、多元的な意志決定のメカニズムを持った政体に価値を認め、そうした多元的国家観に親和的であることが推察される。